

南方（ニューギニア）

「渾」作戦斯く戦えり

兵庫県 田中英雄

出征の時の家庭の状況は、父も母も早く失い、兄一人、妹二人の家庭でした。私は高等小学校を出ると丁稚奉公に出て、夜は青年学校と戦時下の苦しい生活でした。

昭和十八（一九四三）年一月十日の現役入隊です。福山第四十一連隊です。そこで軽機関銃射手として三カ月の初年兵教育を受けました。初年兵教育終了後、満州独立守備歩兵第三十大隊に転属し、本部付兵器係を命ぜられました。

昭和十九年になり南方の風雲急を告げ、満州から続々精銳部隊がフィリピン・ニューギニア・南方諸島に投入されました。

第一次渾作戦を遂行するため、海上機動第二旅団が昭和十八年十二月公主嶺で編成されました。その内容は第一独立守備隊所属の第八、第九兩隊、第二十九大隊、第三十大隊の歩兵を基幹として、その他、戦車隊、高射機関砲隊をはじめ、各地の特殊部隊多数で占められ大半が現役でした。不思議なことに輸送隊が設置されず、後日、どこかで合流してくるものと判断していました。

海上機動旅団という名称の部隊に転属させられた一同は「海上、海上」と呼ばれ「まさか、俺達は海軍に転属になったのではあるまいな」と一時思いました。

四月早々、前記の独立守備隊を主として、各部隊は旅順に集結し、大連で一万トンの「青葉丸」に乗船出航しました。この海上機動第二旅団こそ、大木宮が最新装備の部隊で敵占領地の重点地区にきりもみ逆上陸させるトラの子の旅団でした。

将兵数約三千人余と、重火器、弾薬、糧秣を満載し四月十二日夜、行き先も知らず乗船させられたのです。十四日、桜花爛漫の門司に入港しました。

十九日、夕刻「青葉丸」を含め十三隻の輸送船と二隻の海軍小型護衛艦が一斉に関門海峡を後に船出しました。関門海峡を出れば、いつ敵潜の魚雷がふつとんでくるかわかりません。誰が口火を切ったともなく軍歌の大合唱となりました。

船団は敵潜を避けシナ海沖合を南下し、四月十九日高雄港に到着、五月四日マニラ湾に着きました。五月五日マニラを出港。それから魔のスル海でした。突然「雷跡！」の怒号。とりかじ、おもかじの余裕もなく「やられた！」の声と共に高さ四メートルほどの水

柱。甲板上の重量物・兵員は皆船尾へ移しました。あわや沈没かと思ったのですが、船は海面すれすれのところで水平になりました。やれやれ助かったと思いましたが九人の将兵の行方不明が出ました。

五月九日、沈没寸前のヨタヨタ船は南の島のザンボアンガという美しい小港に着きました。ホッと一息する間もなく、ゲリラ討伐の命令が出ました。それがニューギニアの「ピアク」の争奪を巡る日米両軍の精鋭の正面衝突の始まりでした。

「明 三十日、夕刻までに、ザンボアンガ港にて全員乗船準備を完了せよ」。ゲリラ討伐参加軍は何が何やらわからず昼夜ぶつ通して大汗で突っ走り、夕刻までに集合しました。夕刻、棧橋におもむくと、迎える船は輸送船でなく重巡「青葉」と軽巡「鬼怒」の二隻の軍艦です。

外海に出ると三〇ノットの速力、陸兵はめまいと船酔いの繰り返しです。翌二日、いよいよ敵機動部隊との戦闘に入りました。

渾作戦は大本営陸海軍首脳が、昭和十九年五月下旬

以後反撃を立案し、その為の準備を「あ号」作戦準備と言いました。小沢治三郎の率いる第一機動艦隊がポルネオ北東のタウイタウイを機動中で、「大和」「武蔵」を基幹として、空母九隻を含む総艦七十三隻の大艦隊でした。

「あ号」作戦準備は五月下旬に完了。第一航空艦隊陸上機で西部ニューギニア以西の各基地に展開、第一機動艦隊の空母を比島内部に集結一挙に勝敗を決しようとしていました。

米軍はアイタベとホーランジアに上陸し、サルミ地区で日本軍と死闘中で、ビアク島への上陸開始は六月中と予想されました。

連合艦隊がサルミ沖で敵艦隊の撃滅を立案、また第三十五師団から二個大隊、その他から三個大隊のビアク島上陸を企図しましたが、五月十七日ワクデ、サルミに敵が上陸し、二十七日にはビアク島にも上陸作戦が開始になりました。

日本軍はビアク島の兵力増強をかねてから準備していましたが、米軍の制空・制海権に制せられ、その

上、増援中の第三十五師団の三分の二が海没し、米軍上陸時点では一個連隊でこの米大軍と戦わねばなりませんでした。

米軍は空母群を遙か後方に置き、第一線は、戦艦三、巡洋艦五、駆逐艦十数隻と、水陸両用戦車と上陸用舟艇多数で押し寄せてきました。フェーラー少将を長とする米第四十一師団の上陸作戦援護のためニミッツ大将麾下の主力機動部隊の出撃を待ち、これを撃滅するのが連合艦隊の「あ号」作戦でした。

海軍は事ここに至り、積極的に陸軍との共同作戦に賛同してきました。阿南大将も海軍の提案に双手をあげて賛成、ビアク三大飛行場の死守を決意し、陸軍の精強部隊を緊急に手配したのです。これが「渾」作戦です。

輸送部隊として、海上機動第二旅団が再重装備の上、ビアク島に投入することとなりました。阿南大将も玉田旅団に絶大な期待を寄せていました。「ザンボアンガ港にて全員乗船準備を完了せよ」の命令を受けたのは、この時です。

玉田旅団の海軍側の海上輸送の総指揮官は、第十六戦隊司令官左近允尚正少将であり、二回にわたりバラオソロンへ西ニューギニアへの決死艦隊輸送を成功させた猛将です。

陸兵たちは目まいと船酔いで死の苦しみです。夜が明けるところミンダナオ島のダバオに停泊しました。玉田旅団の将兵は全くと言ってよいほど何も知りませんでした。

この日の渾作戦合同会議終了後、友軍偵察機がドルビル岬（ビアク東方約二〇〇キロ）北方約一一〇キロに敵有力機動部隊が西進中なのを発見との発表がありました。いよいよ来るものがきました。

六月二日、玉田旅団の輸送船が出発し、六月四日、ビアク島上陸予定でしたが、五月二十七日、米軍はビアク島に上陸しており彼我の状況は急転しています。玉田旅団のビアク突入は四日午後十時と決し「青葉」「鬼怒」「扶桑」の他駆逐艦二隻の護衛の下ビアク島逆上陸を目指し東航しました。

航行中、突如四発の飛行機が高度をこちらに向け飛行してきました。噂に聞いていた空の要塞B 24でした。海兵の誘導で私達は艦底へもぐりこみました。わが戦艦・巡洋艦・駆逐艦に二機は直進して、激しい銃撃戦が展開されました。B 24は被弾したか失速して東へ消え去りました。玉田旅団の軍医が負傷兵の手当てをしました。

三日、夜が明けるとわが艦隊の姿は見えません。後で判明したことです。敵機動部隊誘致のオトリなりました。海軍としてニミッツ機動部隊の動向がつかめず、ましてその中、何隻がビアクに来るかが不明なのに焦燥していました。

豊田連合艦隊司令長官は「渾作戦は一時中止、扶桑以下の護衛艦は第一機動艦隊に復帰し、輸送艦はソロモンに入泊し、機をみて渾作戦を再興せよ」と電令したのでした。さらに「玉田旅団の輸送は敵情に応じ駆逐艦によるも差し支えなし」との電令です。

軍部隊（第十九・第八十七駆逐艦搭乗部隊）と玉田旅団はこの夜、ツイゲ方面西部のツイサイ湾に入り仮

泊しました。これを聞き、阿南第二方面軍司令官は渾部隊指揮官左近允少将に「一刻も遅延は許されない。直路ビアクに突入されたし」と打電したのです。

左近允少将は、これに答えて「ソロンでの敵投下の磁気機雷の掃海遅延と敵機来襲とを合わせ判断し、ソロンに寄港せず、五日午前二時三十分ツイサイ湾を進発、午前十時三十分ビアクのコソム（北岸）とソルド（南岸）に第十九、第二十七駆逐搭乗部隊（二個大隊）を上陸開始させ、玉田旅団を乗せた第十六戦隊（巡洋艦青葉・鬼怒）はそこまで援護したのち分進し、午後九時マノクツリに揚陸させる」旨の計画通報を四日午前六時に行いました。

ところが四日午前十一時三十分、陸軍司偵機が「ドルビル岬三十度沖約一〇〇キロに敵空母二、戦艦一、駆逐艦一〇、戦闘機二機ずつの三群を付した敵機動部隊西進中」と再び報告がありました。

渾部隊はツイサイ湾を抜錨、敵を欺くため西航し、日没後反転東航して夜中にソロンに接岸、揚陸を開始しました。午後八時過ぎ、我が飛行機から「敵は巡

四、駆八、空母なし」の無電が入り連合艦隊は午後十時三十分「渾作戦再続行」を命令してきました。このとき既に玉田旅団は暗夜雨中をソロンに上陸を完了していました。

玉田旅団長はソロンの通信参謀から「渾作戦遂行に燃料補給が必要なのでアンボンに回航する。再航日時未定」との連絡を受けていました。玉田旅団長は米艦隊は渾部隊のビアク進出に対抗しビアク方面に増援派遣してきたものと知りました。部隊長でない玉田旅団長は、情報と乱れる各種命令で頭を抱えこんでおる様子でした。

マッカーサーもビアク南岸道経由の飛行場地区進入企図が粉碎され、ヒュース師団長要請のサルミ地区からの輸送一六三連隊は未だ到着せず、渾部隊と玉田旅団のビアク上陸も迫っていたころでした。

一方、トムでは田上第三十六師団長が追撃命令を下達しました。他方アイタベでは安達第十八軍司令官は虎の子の第二十師団で米第三十二師団を約十五キロ撃

退し敵の天然防御線のドリヌモア河を突破し、敵陣にクサビを打ち込みました。米軍に幸いしたのはホーランジアから進出した米艦隊に空母二隻ありと誤解し、玉田旅団のソロン上陸とその輸送艦隊がアンボンへ退避したことで米軍は救われました。日本軍は惜しくも第一回ビアク逆上陸の絶好の機会を逃してしまいました。

六月四日ビアクに延べ三百十機の敵機が来襲し、また艦砲射撃も熾烈を極めました。待ちに待ったビアク増援渾作戦の一時中止の電報が午後入電しました。

沼田参謀長、葛目連隊長、千田少将は何が何だか判らず悲憤慷慨していました。葛目大佐は七夕夕刻以降もボネックスに再び強行夜襲を行うこととしていました。

しかし、わが中枢陣地の西洞窟付近は命中弾が多く、弾丸落下の都度洞窟内は激震し、多数の戦死者を出しました。この時点での敵兵力は絶えず補充更新され常に我に数倍する圧倒的な兵力を保持しており、わが軍の劣勢は日に日に明らかでした。

艦上での戦闘が多く、陸海共同の戦争と言う感じで、島に上陸しない限り私達は手も足も出ませんでした。上陸してからも、初年兵教育や満州での訓練は役に立たず、空爆と艦砲射撃との戦いでした。

この後、戦闘は続きますが、第一次渾作戦は以上のようなものでした。

西部 ニューギニア・

ハルマヘラの苦闘

茨城県 飯塚 静 男

私は、大正十(一九二一)年茨城県に生まれました。

軍歴は以下の通りです。

昭和十八(一九四三)年七月、歩兵第一〇二連隊
(茨城県水戸市) 補充隊に入隊。

八月、中支派遣軍第五十二野戦道路隊要員として水戸屯営出発。九月、中支湖北省孝感着。